

今日は8月6日。今日は朝から広島市の平和公園で原爆記念の式典が行われていました。私たち日本人は8月6日と言えば、広島に原子爆弾が落とされた日、として記憶しています。今から34年前、九州教区は教区設立95周年の記念大会を熊本県のグリーンピア南阿蘇で開き、やはり8月6日が日曜日になり、広い庭に座って礼拝をしました。そしてその時に説教者として招いたのは沖縄教区の関本肇司祭でした。

関本先生は、「ピカドンって、知っていますか？」という問いかけから話を始められました。ピカドンとは、広島に落とされた原子爆弾が、最初はピカッと光り、その後ドンという大きな音と共に爆風が吹いて、広島市の街が焼け野原になったことを伝える言葉になりました。

ところが、今日の礼拝で読まれる聖書の箇所は、広島市の原爆のピカドンと関係があるかのように思える、ということでした。たとえば旧約では、モーセがシナイ山から下った時には、モーセの顔が光を放っていましたし、福音書の方では、イエス様の顔の様子が変わって、服は真っ白に輝いて、そこにモーセとエリヤが栄光に包まれて現れたことが書かれています。そして、その光景を目の当たりにした弟子のペトロが、その時の衝撃的な体験を今日の使徒書に書き留めています。『わたしたちは、キリストの威光を目撃したのです。荘厳な栄光の中から、「これはわたしの愛する子。わたしの心に適う者」というような声があつて、主イエスは父である神から誉れと栄光をお受けになりました。』と言っています。

そこで関本司祭は『今日は8月6日。神様のピカドンに当たった日』と覚えましょう、ということだったと思います。高い山の上で、モーセもエリヤもイエス様も、そして弟子たち三人も神様の光に当たります。そして「ドン」という音、つまり神様の声を聞いたのです。

今日の福音書は、「この話をしてから八日ほどたったとき」という言葉で始まっています。この八日前、イエス様と弟子たちは、イスラエルの北の方、他の福音書によると、フィリポ・カイサリアという所へ旅をしていたようです。そして、「あなたがたはわたしを何者だと言うのか」という質問をすると、ペトロが「神からのメシアです」と答えたのです。ところが、イエス様がやがて殺され、三日目に復活することを言うと、このルカによる福音書では書かれていませんが、ペトロはそれをいさめ始めました。しかしイエス様はそれを叱って「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」と言われました。弟子たちはイエス様のことを、理解していなかったのです。

それから八日ほどして、イエス様は、エリヤやモーセと一緒に語り合っている姿になりました。彼らは、「イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた」とい書かれています。

ところが、ここでペトロは口をはさんで「先生、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」と言います。そして、『ペトロは、自分でも何を言っているのか、分からなかったのである。』とこのルカによる福音書の著者は付け加えています。

ペトロは、8日前の時と同様、イエス様の受難の意味がわからず、そして、そんな世間から離れて、山の上ですばらしい光景を見た感激だけで、「仮小屋を三つ建てましょう。」と言ったのだらうと思います。

そこに、雲が現れてきます。雲は、モーセがシナイ山に登った時以来、神様が現れることの象徴です。そして、神様からの声が聞こえてくるのです。「これはわたしの子。選ばれた者。これに聞け。」

これは、ペトロがイエス様のために、仮小屋を建てる、という人間の努力よりも、イエス様からの声を聞いて、それに聞き従うことの方が大切であることを教えている、ということでしょう。

今年は8月6日の主イエス変容の日が、日曜日に当たるので、この箇所が読まれましたが、私たちはこの変容の話を、毎年大斎節前主日に読みます。大斎節の直前の日曜日に、ふさわしい箇所なのです。

「大斎節が始まるから、今年は何をしましょう。」と、修業を始めることは、ちょうど、何もわからないで、建物を建てようとしているペトロたちと変わらないように思うのです。

それでは、私たちがイエス様の声を聞いて従うとは、具体的にどういうことなのでしょう。

今日の福音書に名前が登場したエリヤは、旧約では、シナイ山に居ます。彼は、北イスラエル王国で、悪名高いアハブ王と妃のイゼベルの夫婦と対決し、カルメル山の上では、バアルの預言者たちと戦って勝つのですが、イゼベルに命を狙われ、命からがら、シナイ半島の、以前モーセが神様から十戒を授かった、シナイ山まで逃げてきていたのです。

きっとそこに行けば、神様の声を聞ける、と思ったのでしょう。そして、実際神様からの声を聞き、エリシャに油を注いで、エリヤの後を継ぐ預言者にする命令を受けたのです。

イエス様にしても、エリヤにしても、高い山に登って、神様のところに近づき、その声を聞いて、自分の使命を悟り、山を下って、自分の現実の世界に戻ってゆく、ということの大切さを知らされました。「神様の声を聞く」というのは、「祈る」という言い方に置き換えられると思います。

私は、以前、人から勧められて、祈りについての本を読んだことがあります。

【人は何のために「祈る」のか】生命の遺伝子はその声を聴いている。という副題がついています。村上和雄という、筑波大学の遺伝子の科学者が、棚次正和という宗教学者と、祈りについて、科学的な視点から、祈りについて探求した書物です。

この本の最初の方に、『最近、「心と遺伝子研究会」というのを作った。自分が遺伝子の研究を続けているうちに、人間の心のあり方が、遺伝子の働きに影響を及ぼしていると確信するようになった』ということを言われます。そして、「笑うこと」が、糖尿病患者の食後の血糖値上昇を抑えることを発見した、と言います。そして、これには、祈りをするのとしなないのとで、やはり祈る方が、病気がなおる率が高い、というような話が入ってくるのです。

読み進めるうちに、人に暗示をかけるような、たとえば100人ぐらいの学生の中から、5人ほどを無作為に選んでおいて、「君たちは100人の中で、特に優秀だ。」と言ってほめたら、そのあとその人たちは、大変学力が伸びた（ピグマリオン効果）、とか、偽薬（プラシーボ）」を渡して、これを飲めばあなたの病気は治ると言ったら、効果があった、など、人間は気分で体の調子まで変わる、などの例をあげながら、話をするんです。「病は気から」みたいな話になるわけでしょう。

そんなことが、祈りということと結びつくんだろうか、安っぽく見られているのではと思いました。ところが、ところどころ、ハッとするようなことが、出てくるんです。

「なぜ、祈ることを続けてきたか」というタイトルの章で、人間は、自分ではどうしようもない問題、たとえば病気になった時、祈ったら治った。だから、困った時に、人間は祈るんだ。しかし、祈っても治らない場合の方が、もっと多いかもしれない。それでも祈るのはどうしてか。

こんな話が出てくるのです。

『合格祈願をして、神社の賽銭箱に1万円を入れる。100円でもいいが、1万円のほうが効くような気がして奮発する。しかし結果は不合格。それでも「お賽銭を返してくれ」と言う人は、まずいません。

ここに、大昔から祈ることに人々が見出してきた大きな効用がうかがえます。人は自分の欲求や願望を満たしてもらうために祈りますが、そうならなくても祈ることをやめませんでした。その理由は、もっと大きな効用に気づいたからです。それは何かといえば「心が安定する、ブレない生き方ができる」ということです。

人間にとって一番の問題は死でした。ふだんは意識していなくても、命に限りのあることはいやでも知らされる。また日々の生活の中にも、さまざまな不安や恐怖、悩み、迷いなどが出てきます。そういうものと対峙しながら生きていくのはけっこうつらいものです。

不安定な心を何とかしたいと人々は考えました。宗教は人々のこの気持ちを吸収して発展していきます。そのとき決定的な役割を果たしたのが、祈りだったと思われます。祈りを捧げていると心が落ち着きます。心の中に中心軸ができて、ブレない生き方ができるようになるのです。人々はそのことに気がついたのです。

「ブレない生き方」とは、人間が生きていくために必要な生命エネルギーが流れてくる、その根源と結び付くということです。生命の根源とつながることが祈りなのです。生命の根源から与えられた生命力によって人間は生きている、このことを人間は太古から直観していたはずです。

宗教ではこの生命の根源を神や仏と呼んでいますが、宇宙法則や大生命といっても同じことです。「ブレない」とは、このような生命の根源に人間の意識がしっかりと結び付くことであり、それが祈りによって実現されるのです。』

どうでしょうか。

イエス様は、病気を治したり、沢山の食べ物を与えることで、注目をあび、本来の神様の御心を行うという使命がブレる危険を感じたのではないかと。また、自分が逮捕され、殺されるという出来事を前に、恐れを感じ、神様からの力と言うか、恵みを頂いて、乗り越えようとして、そんな時に祈られたのではないかと、私は思ったのです。

私たちが目指すことは、『自分の心の中心軸へイエス様に来ていただき、自分がぶれない、』そんな祈りの生活をしたいと思います。

このところしばしば引用する聖句ですが。

『生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。』
(ガラテヤ 2 : 20)

これを心にいつも抱いて、歩む者でありたいと思います。